平成　30　年度　地域文化学専攻・比較文化学専攻　学生派遣事業　研究成果レポート

髙野哲司

１．事業実施の目的

日本の都市の庭における人と植物との関わりを明らかにする。

２．実施場所

東京都台東区谷中地域の住宅、東京江戸博物館

３．実施期日

平成　30　年　12　月　4　日（火）から　12　月　10　日（月）

４．成果報告

●事業の概要

本事業の実施内容は、（１）東京都台東区谷中における住宅の庭の植物に関する聞き取り調査および（２）江戸東京博物館における江戸時代から高度経済成長期の植物利用に関する資料収集の 2 点である。

（１）平成 30 年 12 月 4 日から 12 月 10 日まで東京都台東区谷中において、住宅の庭の植物に関する聞き取り調査を行った。具体的には、台東区映像アーカイブ「谷中のすまいとくらし」（1981 年撮影）、『谷中のすまい』（1985 年）『谷根千路地事典―東京の地方叢書①』（1987 年 谷根千工房）、『台東原風景』（2015 年 台東区教育委員会）に掲載されている地点に赴き、地域住民の方々の自宅を訪問し、庭の植物の種類、植物の利用方法、庭の風景についてインタビュー調査を行った。

植物の入手経路については、「その植物はどこから来ましたか。花屋などで購入されたもの、他の方からいただいたものはありますか」という質問を行った。植物の利用方法については、「食用や薬用、生け花に使われるなど、生活の中で何かに使われている（利用されている）種類はありますか」という質問を行った。聞き取り調査の際には、庭の植物の種類の記録や庭全体の写真撮影も行った。

また、地域住民の方々には、「戦前から残されている植物はありますか」という質問を行った。ナンテンやヒイラギなど儀礼に用いる植物も観察されたため、これらの植物の利用方法について質問を行った。イヌタデやカタバミなど庭に自然に芽生えてきたと思われる植物も観察されたので、入手経路、その利用方法について「庭に自然に芽生えてきた植物はありますか。その植物を何かに使われることはありますか」という質問を行った。

さらに、戦後から高度経済成長期における庭の植物利用の実態を探るため、台東区映像アーカイブ「谷中のすまいとくらし」（1981 年撮影）、『谷中のすまい』（1985 年）『谷根千路地事典―東京の地方叢書①』（1987 年 谷根千工房）、『台東原風景』（2015 年 台東区教育委員会）等の既往文献に掲載されている写真を地域住民の方々に見ていただきながら、撮影場所の特定を行うとともに、戦後から高度経済成長期における植物利用を中心に聞き取り調

査を行った。
（２）平成 30 年 12 月 4 日から 12 月 10 日までの調査期間中に、江戸東京博物館（東京都墨田区）を見学し、江戸時代から高度経済成長期における植物利用に関する資料収集を行った。

●本事業の実施によって得られた成果
以下に本事業の実施により、東京都台東区谷中地域の住宅および江戸東京博物館で得られた成果を詳述する。

1. 東京都台東区谷中における庭の植物と人との関わり

1-1. 庭の植物の入手経路および植物利用

東京都台東区谷中の地域住民の庭における植物の入手経路には①購入、②贈与、③採集が確認された。①購入については、購入場所を居住者の方に質問したところ、ハボタンやサンショウなどを近くの花屋で購入する事例、スーパーでフユサンゴを購入する事例が確認された。②贈与については、ユズの果実などを近所の住民に居住者が差し上げている事例が確認された。③採集については、居住者が散歩の際にヤマブキの実生を採集し、庭に移植して栽培している事例が確認された。居住者が出身地からイワヒバやトクサを持ち帰り、プランターや植木鉢に植えて栽培している事例も確認された。

東京都台東区谷中における庭の植物の利用方法としては、⑴食用の事例、⑵葉を食器として活用する事例、⑶儀礼の事例が確認された。

⑴食用では、ウメの果実を収穫後、ジュースとして飲用する事例が確認された。自宅で栽培したイチジクの果実を収穫後、ジャムに加工して食用に供している事例も確認された。ミョウガを薬味に用いている事例も確認された。

⑵葉を食器として活用する事例では、自宅で栽培しているハランの葉を寿司の下に敷いている事例が確認された。

⑶儀礼の事例では、家の玄関にヒイラギを置き、厄払いを行っている事例が確認された。また、居住者の方からは「家には表鬼門と裏鬼門があり、この 2 ヶ所にナンテンやヒイラギを植えます。土地が狭い場合は、表鬼門または裏鬼門のどちらかにナンテンやヒイラギを植えます」というコメントをいただいた。その他、ナンテンの葉を「7 つの葉っぱ」と称し、縁起が良く、難を逃れるという意味で財布の中に入れるという事例が確認された。

庭に自然に芽生えてきた植物を利用している事例も確認された。具体的には、庭に自然に芽生えてきたナンテンの実生を植木鉢に移植して栽培する事例が確認された。植木鉢の中に自然に芽生えてきたアジアンタムの葉やシャリンバイを鑑賞している事例も確認された。庭に自然に芽生えてきたカシワバアジサイ、ノシランを鑑賞している事例も確認された。庭に自然に芽生えてきたビワやクチナシを植木として活用している事例も確認された。

1-2. 戦前から残されている植物

戦前から残されている植物については、慶応生まれの祖父が植えたというシラフジの鉢

植えが残存している事例を確認することができた。居住者の方からは、このシラフジの鉢植えは、かつて朝倉彫塑館に展示されたこともあるという貴重な情報をいただいた。また、戦前には物理学者が住んでいた家では、戦前に植えられたと思われるモミジが残存している事例も確認することができた。

2. 過去の写真の撮影場所の特定

既往文献に掲載されている写真を地域住民の方々に見ていただきながら、撮影場所の特定を行うとともに、戦前の植物利用を中心に聞き取り調査を行ったところ次のような成果を得ることができた。

2-1. 過去の写真の撮影場所の特定

『谷根千路地事典―東京の地方叢書①』(1987 年 谷根千工房) に掲載されている谷中 1 丁目の路地の場所を特定することができた。また、台東区映像アーカイブ「谷中のすまいとくらし」(1981 年撮影) に記録されている長屋の場所について、80 代女性に尋ねたところ、場所を特定することができた。

2-2. 戦前における植物利用

谷中地域で商店を営む店主 (70 代男性) にインタビューを行ったところ、谷中 5 丁目付近では、かつては長屋や一軒家においてアオキが栽培されていたことが明らかになった。さらに、谷中 5 丁目付近では、戦前からエノコログサが生育しており、店の店主からは、子どもの頃、自生するエノコログサの穂を用いてネコと遊んだという話を伺った。その後、店主の話をもとに、谷中 5 丁目において植物調査を行ったところ、エノコログサが現存していることが明らかになった。

3. 高度経済成長期における植物利用

3-1. 高度経済成長期における植物の特徴

居住者 (80 代女性) に高度経済成長期の植物利用の特徴について質問したところ、次のようなコメントをいただいた。居住者 (80 代女性) からは「戦後、日本の植物は人工的なものになりました。自然の植物、素朴で小さい植物、在来の植物が愛でられることがなくなりました。戦前には見られなかった大きなバラやダリアといった大輪の花、カラフルな色の花、派手な花が注目されるようになりました。ユリも、いわゆる香水の代用として匂いが良ければそれでよいと思われるようになった。自然を愛でる気持ちが少なくなり、モノに対する関心が深まりました。植物に対する感覚が変わってしまったのです。高度経済成長期は、お金儲けに関心が集まった時期であり、植物が消耗品として扱われるようになりました。大輪のバラやユリは自分の家の財産として認識されるようになったのです。造園業も盛んになりました。具体的には、不忍池のイチョウは、3 年で植え替えをしています。イチョウが 3 年で枯れることはないのですが、若木を植えてから 3 年後には 3 年前に植えた株を除去して、新しい若木を植えなおすことが行われています。このようにしないと園芸業者が儲からないのです。植物に対する稀少価値が付加されるようになったのも高度経済成長期です。稀少価値が重んじされるようになり、下界では育たないはずの高山植物の栽培も行われる

ようになりました。路地の舗装化が進み、高層マンションが建設されるようになり、植物の生育にとって好ましくない状況になったのが高度経済成長期の日本です。」というコメントをいただいた。

3-2. 高度経済成長期における庭の変化

居住者（80 代女性）に高度経済成長期の庭の変化について質問したところ、「戦前からの庭が有る家でも親が居なくなると、子どもは、庭の管理が面倒であるという人が多いです。そこで、竹垣を壊して緑を減らし、敷地いっぱいに家を建て直しています。」というコメントをいただいた。また、戦前からの井戸の跡が残されている家の居住者に高度経済成長期における庭の変化について質問したところ、「私の家の庭には戦前から生垣がありました。生垣があった頃は、家と家の境目がはっきりとしていませんでした。昭和 45 年頃に台東区の決まりで家と家との境目を明確にすることが義務付けられ、
その際に生垣がコンクリートの塀に変わりました」というコメントをいただいた。

4. 江戸東京博物館における資料収集

4-1. 江戸時代における植物利用の展示

江戸時代から高度経済成長期にかけての植物利用に関する資料を収集することができた。当日は、井上誠一氏（江戸東京博物館ボランティアガイド）に博物館内において、植物利用に関する展示を中心に解説していただいた。植物利用の中でも、とりわけ食用と儀礼に用いる植物について詳細に解説していただいた。井上氏に「江戸時代の長屋においてカキノキ、ビワ、オモト、ナンテンが栽培されていたのはなぜですか」という質問を行ったところ、井上氏からは「長屋や庭における植物の種類は、江戸時代の食糧事情と関係があると思います。江戸時代には八百屋があっても、現在のように野菜や果物の種類が豊富ではありませんでした。また、庶民にとって砂糖は高級品でした。そのため、カキノキのように自宅でも栽培が可能であり、甘味を補うことができる種類が長屋や庭に植えられていたと考えられます。ビワは病気の人が体力をつけるために食していた果物です。オモトが好まれたのは常緑であるためです。常緑の植物は、生命力がある植物として認識されていたのです。ナンテンは鬼門に植えられていました。ナンテンの葉を赤飯の上にのせるのは、祝いの時に災難があっては困るからという理由にもとづいています。それから、江戸時代においては花の名所が生まれたことも重要です。特に、花の名所が生まれた過程が大切です。最初は様々な自然環境に生育する植物を野外から採集して、家のまわりに植えることが行われていたと思いますが、当然、水分や温度条件により栽培できずに枯れてしまう種類も有ります。そこで、自分の家では栽培できない種類の植物は、その植物の生育地に見に行くことにしたのです。庶民は、植物が好む場所を知っていたのです。このような過程を経て花の名所が生まれたと考えられます。それから、庶民はミツバやセリは川の縁などの湿地帯に生育していることを知っていたので、湿地帯へ出かけて採集し食用に供していました。そのため、店舗でセリやミツバを買う必要はなかったのです」というコメントをいただいた。

4-2. 戦後から高度経済成長期における植物利用の特徴

井上氏に「戦後から高度経済成長期における植物利用の特徴はなにでしょうか。また戦後、リンゴ箱やミカン箱が植物栽培に使われなくなったのはなぜでしょうか。」と質問を行ったところ、井上氏からは、「大量生産、見栄えの良さが重視されたこと、大輪の花が特徴だと思います。ミカン箱が使われなくなったことは、ミカンの輸送方法の変化とも関連があると思います。ミカンの輸送に木箱が使われなくなったのです。発泡スチロールが登場したことも大きいと思います。周りの状況が変化すると木箱を使う側にも変化が生じます。高度経済成長期の東京では、大量のゴミ問題、水質汚濁、地盤沈下が社会的な問題となりました。」というコメントをいただいた。

4-3. 1980 年代の谷中地域における庭の植物に関する映像資料

江戸東京博物館における映像データベースにおいて、谷中地域における庭の植物に関する映像資料を調べたところ、『あき・らんだむ』（1980 年 東京都映画協会）および『谷中界隈そぞろ歩き』（1988 年 東京都映画協会）という２つの映像資料が残されていることが明らかになった。いずれもカラーで撮影されており、1980 年代の谷中地域における庭の植物利用について分析する上で貴重な映像資料であるといえる。『谷中界隈そぞろ歩き』（1988 年）には、筆者が研究対象としている昭和初期に建築された四軒長屋（谷中 6 丁目）が映されており、アナウンサーが居住者にインタビューをしている場面もあった。また、筆者が既往文献として用いている『谷根千路地事典―東京の地方叢書①』（1987 年 谷根千工房）の執筆者の一人である森まゆみ氏が谷中の町の特徴について語る場面も収録されていた。今回見つかった２つの映像資料は、江戸東京博物館内でのみ閲覧可能な資料である。次回、東京江戸博物館を訪れる際には、これら２つの映像の精査を試みる予定である。

●本事業について

この度は、学生派遣事業を活用させていただいたことで、東京都台東区谷中と東京江戸博物館で現地調査を行い、研究を一歩前に進めることができました。深く感謝いたします。